

あそび心が「とばをはぐくむ」

「読書のアニメーション」からの提案

まなび探偵団アニメーションクラブ

岩辺 泰吏

一 みんなちがつて みんないい

「みんなちがつて みんないい」——訓話でよく言われることばだ。たしかにそうのだが、今の日本はそうではない。みんなと同じでなければ不安なのだ。一人ひとりが違うのだ、私は私でいいのだということになつてくることができる機会さえ、なかなかないものだ。正解は一つ、余分なことを考えるのは無駄、ましてや疑問をさしはさむのは愚かな行為、みんなへの迷惑なのだ。

語彙を広げる「ことばをはぐくむ」というとき、そういう「ブレイク」を取り外すやわらかな安心の「学びの場」が必要だ。そのためにアニメーションという「遊び心」を提案したい。アニメーションとは何かという論は別の機会にさせていたたくとして、ここではこう述べておくだけにしたい。アニメとは魂、アニメ

マシオンとはその魂に元気を吹き込み生き生き・ワクワクと活性化させること、その具体的な活動であると(注1)。

まず、短いことばを書きぬいたカードを組み合わせて詩を作る遊びから。

こやま峰子詩集『ぴかぴかコンパス』(大日本図書、一九九一年)より。

傘

雨をあびて 花 ひらく

雨の中に傘が開くのはまるで花のようだという情景だろう。二行に書き分けられた詩。

これを、四枚のカードに書き分けて一組とし、チームで話し合って並べて、一編の詩を作る。

六年生の教室でやってみた。三十九名を十一のチームに分けたが、七通りの詩ができた。それぞれに説明をつけると、同じ作品であつ

ても考え方は違う。最初のことばがタイトルである。*印はそのチームの説明。(友人の教室を借りて行った授業なので、説明をくわしく書き直してもらおうなどということには及ばなかった。以下、今回紹介する実践は同じような状況で進めたもの。)

「傘 雨をあびて／ひらく／花」——①

*花を最後にすることで、傘が花のようだということを強調したいから。

*傘はひらかないと雨をあびないから。題名の傘は花の例えだと思う。

*傘は上から見ると花みたいだから。

*傘は花のように大きくひらいて花のようなきれいな色だから。

「傘 雨をあびて／花／ひらく」——②

*水がないと花が成長しないから。

*花という題名だと関係があまりなくなってしまうから。

「雨をあびて 花／傘／ひらく」——③

*どっちも雨をあびてひらくものだから。

「雨をあびて 傘／花／ひらく」——④

*雨をあびて傘をひらく。雨をあびて花がひらく。

「花 傘／ひらく／雨をあびて」――⑤

*たぐさんの傘がひらいているところを上から見たときの様子を「花」と表していると考えたから。

「花 雨をあびて／ひらく／傘」――⑥

*雨をあびて花がひらいている様子。傘は花びらをたとえている。

「ひらく 花／傘／雨をあびて」――⑦

*花と傘が雨をあびてひらく。

(江戸川区立篠崎第四小学校六年)

「詩の一行を入れかえたりすることで、意味が少し変わったり、全く違ったりすることが不思議でした。そして、発表では、詩の一行の位置が同じで理由もほとんど同じであったり、位置も理由も違うという結果を見て、人の考えは人それぞれだということを知った。」という子どもの感想が共通する思いを表していた。

また、「みんなそれぞれ違った詩ができていたので、詩はことばをつなげて無限に作れるものなんだと思いました。」という感想も出ていた。

わずか四枚のカードに書かれたことばで

も、多様な表現を生み出し、多様な考えを抱擁することができている。それを具体的な場面で実感できたと思う。〃ちがいを個性として

ことばの包む豊かさにおいて発揮させる、そういう誘いかけのゲームとしてとらえてほしいと思つて提起している。

ちなみに、教員研修会でもやっているが、どうも、教員は作者に近いものを「正解」として近づけようとする志向が働いたためか、多様性に欠けることが多い。

二 絵から物語を生む

谷内こうた作『かぜのでんしゃ』（講談社）は、見開き十六場面のうち、十一場面が絵だけで展開されている。

「めを とじて／めを とじて かぜのおとを きこう／とおくから／ほら とおくから やつてくる／かぜのでんしゃ」



『かぜのでんしゃ』
絵と文=谷内こうた
講談社／1982年、新装版2003年

という五ページの後に、男の子がその電車に乗って草原を走り、トンネルをくぐり、夜の空にのぼって、雲の波をぬけ、明るい草原にもどって、電車と別れる。「フルートかチェロのソロ音楽だけでページをめくるように……」と谷内さんは「あとがき」に書いている。各チームに一冊ずつの絵本を渡し、前後を確かめながら担当ページにことばをつけてもらう。そして、みんなで（紙芝居風に）順につけたことばを読んでいくと、一つの物語ができる。これも、さまざまところで行ってきた。教員の研修会ではさすがに詩的な情緒ある作品が出てくるが、ここでも、子どもたちの作品はすばらしい。

1. 風の音／サー、サー、サー、／電車の音／ガタンゴトン、ガタンゴトン、／風の音、電車の音がかさなり／電車は動く。
2. あっ！ 橋だ。ガタン、ゴトン。
3. そして、山の中のトンネルへ
4. やつと見えた。出口だ 出口。ガタンゴトン、ガタンゴトン。
5. ガタンゴトン／「あ、もう出口だっ！」

6. 「あつ トンネルから出た。」／「月が出てる。きれいだなあ」

7. 風をきって進んでいく

8. 雲より上にいった。／目をとじて、風にあたった。／「きもちいい」／「もうすぐ家かなー」

9. あ、野原が見えてきた。

10. もう そろそろおわりだ。

11. ぼくは、最初に乗った木のところにもどってきた。／ぼくはでんしゃからおりた。／でんしゃはかえっていった。／そして、ぼくのでんしゃのたびはおわった。

（鹿児島県垂水市立協和小学校五年）

この文だけでも、場面はだいたいおわかりいただけると思う。とても素直で情感のある表現である。垂水市は大隅半島の中ほど、鹿児島湾に面し、みかん山を背にした細長い地域だ。桜島が父親のごとく常にどっしりと座っている。月もきれいにのぼることだろう。豊かな自然に囲まれていても、それを感じとれる暮らしがあり、また、自由な表現をはげ

ましていく日頃の学級・学校づくりが支えていなければ、ことばは育たない。この五年生たちの詩的といえる表現がすつと出てくるかわりあい、とてもあたたかいものを感じた。

同じ活動をした六年生のクラスの感想には、こんなことが書かれていた。

「みんなと協力すると、一人じゃ考えてなかった意見が出たので、こういう考えもあるんだなあと思いました。様々な意見が出ておもしろかった。字のない本に字を書くと、一人で考えるとわかんないけど、みんなと協力して楽しかった。」

「絵と文がなかなかあわなくて大変だったけど、最後はちゃんと次の文ともつながったのでよかったです。」

「自分の意見を書くことはむずかしいけど、それをみんなが発表しあうことができて楽しかったです。」

「十一チームの文がつながってすごかったです。最初はつながらないと思ったけど、つながってよかったです。」

「たった一つの文を考えることがこんなに大変なんだと気づきました。」

ばらばらで考えたのに、つながって一つの物語が生まれていったという感動は、自分たちのことばが生み出したのだ。

三 絵から詩を生む

とくに、ことばの学びの場では何かとりかかり（拠りどころ）が必要だと思う。ハードルを低くして、ことばが生まれやすい、ことばをひきだしやすい環境を設定することが必要だ。絵本『かぜのでんしゃ』による物語作りなどはそういう考えに基づいている。

こやま峰子詩集『かぜのアルバイト』（朔北社、二〇〇三年）から、各グループに一つずつの詩を読み聞かせ、一周した後にそれぞれの詩に描かれていた絵を示す。それらの中から自分のチームにふさわしい絵を探し出すのだ。そうして、絵と詩との結びつきを意識させる。このウォーミングアップが、次の創作活動を誘い出す上に大事だ。それから、二枚の銅版画を見せる。そのどちらかを選んで、短い詩を考えようという活動だ。全員の作品を紹介することができるのが残念だが。

静かな町の すてきなライブ

はるな

静かな町に ひびく音

明るい光にてらされて

ゆうがな音をひびかせる。

ステージいっぱい広がる光

ゆっくりまくが開いて

自分だけのステージだ。

ぼくの夢

ゆうたろう

ぼくの夢は
作曲家になること
楽しい音楽で
みんなを元気にしてあげたい

僕の夢は

鳥になること
鳥になって
大空を飛びまわって
世界を知りたい

自由

あやか

ぼくが何を考えたって
自由
鳥になりたいと思ったって
いいんだ
心の中では自由なんだ
冬、ぼくは新しい
自由をまたひとつ
みつげだす

(江戸川区立篠崎第四小学校六年)

皆さんはこれらの作品から、どのような絵を想像するだろうか。一枚一枚、絵はちがっているように思える。二枚の絵から生み出されたとはとても思えない。十二歳の心の中に、小さな刺激が多様な豊かな作品を生み出す(注2)。

このような活動(アニメーション)を通してみると、子どもたちは内側にたくさんのことを蓄えていることがわかる。今の教育は、内に内に蓄えるだけの活動になっているのではないだろうか。子どもたちは蓄えたことばの力をたしかめる機会に恵まれていない。それは、テストとか作文とか、スキル化された「発表(話し方)」などに「学力」として収斂されてしまう。人とかかわりを深め、この世界とのつながりをたしかめ、生きる力をあげまし豊かにしていくところのことばの役割がある。そういう「かかわり」の具体的な活動場面の中で、頭から出して・声にし・文にし・物語にしていくな。ことばというものが人と人を結び、人とこの世界とを結んでいく確かな力を持っているものであることを身体化していきたい。

今回、「私のことは・辞典」づくりについても触れられないことが残念だ。語彙学習がえてして国語辞典の書き写しで終わっている。対象をもっと自分に引きつけて、仲間を

意識しながら、自分(自分たちの)のことはで表そうとすることが必要だ。与えられた解釈で満足してはいけない。共通語に対して地方語があるように、わたし語があるのだ。これは『ことばの教育と学力』(明石書店、二〇〇六年)に提起しているのでぜひご覧いただきたい。

注

1 拙編著『ぼくらは物語探偵団(まなび・わくわく・アニメーション)』(柏書房、一九九九年)、『チヨークで書く「希望」』(大月書店、二〇〇六年)を参照ください。

2 用いた絵は「しろいつえ」(P43)、「ろうそく」(PP44-45)。私はこの原画を購入してある。

※本稿で取り上げた児童名はすべて仮名です。

いわなへ たいじ まなび探偵団アニメーションクラブ代表。東京都の小学校在職中から「読書のアニメーション」研究会を主宰、退職後、クラブの月例会及び各地でのワークショップで普及に努めている。